

「今週の終わった？」と隣の机の彼が言った。

「まだ手をつけてもないよ。全く思いつきもしくなくて困ってるよ。」

「まあ最初から完璧にやろうと思わないほうがいいよ。俺も最初の頃は何も思いつかなくて、ぎりぎりになってから、やらないよりはって適当にやってたよ。」と言いながら、彼は手の甲の上でペンを回した。ペンはくると一周して、また人差し指と中指の間に収まる。僕たちが使っている透明のガラスのような素材でできた机と椅子は、空気の上にピタリとおかれている。僕の足の千メートルほど下には雲があつて、その三千メートルほど下は地表だ。今日は天気が良いので、雲の隙間から地表がよく見える。遠すぎてよく分らないけれど、道があるのが分かる。几帳面に細かく等分に分けられて建物が並んでいるところもあれば、大きい緑地も見える。隣の机の彼はよっぽど暇なのか、ずっとペンを回している。昨日もずっとそんな調子だった。

彼のペンの動きをただひたすら眺めて、どのくらい経っただろうか。

「あっ」

新しい技に挑戦しようとしたところでペンが手から落ちた。膝で受け取ろうとしたが取り損ねてペンはどんどん落ちていった。ほんの三秒くらいでも見えなくなってしまった。

「なに見てるんだよ。早くしないと今日終わっちゃうよ、ちょっと貸してみて」ペンのことなど少しも気にしない様子でこちらへ来た彼が机の表面を両手で押し広げるようにすると、見えていた景色にぐっとズームインした。

「この子とかどうよ」彼が何回もズームインしていくと一人の女の子が歩いているのが見えた。

「ロリコンかよ」

「うるさいわ、仕事なんだから誰でもいいでしょ」

中学生くらいだろうか。制服を着て学生カバンを持ち、遠くを見ながら歩いている。こんどは机の表面をかき集めるように手を動かすとズームアウトして、見える視野が少し広がった。周りからも制服を着た人たちが歩いてきて、同じ建物にどんどん吸い込まれていく。

「うん、でもこんな小さい子に悩みなんてあるのかな」

「まあ見てみなよ。」

久しぶりに学校に来た。夏休みが明ける直前におじいちゃんが亡くなって、お通夜やお葬式があったりした都合で何日か静岡のおじさんの家に泊まっていたから、みんなよりもさらに久しぶりだった。授業が始まって一週間近く経っている教室は、学期明け特有の雰囲気も薄れて、いつも机が汚い人の机の中は順調に汚くなってきているし、黒板の時間割には宿題が出たことなどを知らせる書き込みがびっしり並んでいる。来月にある文化祭の準備が進んでいるようで、クラスはその話題で持ちきりだ。自分だけ取り残された感じが少しだけする。

「もう学校始まつてるんじゃない？帰らなくて大丈夫？」

おばさんが、私一人でいる時を選んで言ってきたのは、お母さんに直接言うとなると、どうしても「迷惑だから帰って欲しい」というニュアンスが出てしまうと考えることだろう。お葬式と、ひととおりの事が終わってから二日たった頃だった。

「出席は足りているので、忌引きになる期間が少し過ぎてしまっても学校の方は大丈夫です。」私は気付かないふりをした。私も昨日からお母さんにいつ帰るのか聞いているけれど、もう少しと言うだけで、いつ帰るつもりなのか、先の事を何も考えていないのかわからない。私は自分のお父さんが死んでしまった時の事を想像してみても、お母さんの気がすむまで静岡にいたいと思った。

宿題が終わったので、静岡の親戚が東京に遊びに来る時よく買ってきてくれる、うなぎパイの工場を一人で見に行った。私はこのお菓子が小さい頃から大好きなのだ。たしかおじいちゃんも買ってきてくれたことがある気がする。帰りにお土産売場のモニターで、うなぎパイのCMがエンドレスで流れていたのをずっと見ていたから、家に帰ってからもその歌がずっと頭の中で流れていた。変な曲で、変な衣装で、変なダンスを踊っていた。

静岡に来た日より涼しくなっているのを感じたが、学校では私がいなくて困る人は特にないだろうし、夏休みが少し長くなったと思えばいい。

「…今の何？」夢から醒めた時のような、どちらが現実かわからなくなるような感覚を振り払いながら顔をあげると、彼はいつの間にか隣の机にもどっていて、にやにやしなからこつちを見ていた。

「そうやって、ターゲットを絞るとその人の置かれてる状況がわかるんだよ。だから、それを踏まえてその人の悩みを解決すれば良いわけ。」

「そう言われても、この子の悩みを解決するってどうすればいいのかわからないよ。」

「まあやってみなよ。なんでも出来るから。物を動かしたり他の人を動かしたり、念じればなんでも出来るよ。でも一つだけルールがある」と言って彼はまたペンを回した。

「人に俺たちの存在を知られちゃいけないの。知られたらどうなるのかは知らないけど。でもそんな不安そうな顔しなくても大丈夫、そう簡単にバレないから。いままでかなりの事例みてるけど、バレた人見たことないから。」

「テストはじめます」という英語の先生の声でふと我に返った。いつの間に入ってきたんだろう。

今日単語テストがあるらしく、周りのみんなは机の上が筆記用具だけになっていた。急いでペンケースを取り出そうとしたが、鞆のどこにもない。しまった、帰省の時リュックサックに入れたままだ。

静かになった教室の中に、私の鞆を探る音だけが響き渡っている感じがした。あまり仲良くないけど隣の子に貸してもらえるかな、と考えはじめた瞬間、右手が鞆の底に細いものを見つけた。

取り出してみると、いつも使っている物より少し高級感のあるシャープペンシルだった。こんなもの持ってたっけ、いつから鞆に入ってたんだろう。

とりあえず助かった！神様ありがとう。